

第2部 随筆(作文) テーマ「ごはんのにおい」

一般の部

佳作

ご飯のいい匂い

宮内瑞穂

ご飯が炊きあがった。かまどからぷんとい  
い匂いがしてきた。かすかにほの甘くて、幼い頃  
から、慣れ親しんできた、このご飯の匂い。鼻を  
くすぐる優しい匂い。思わずお腹がぐうっとな  
る。お腹は正直者だ。匂いに即座に反応して、お  
昼どきが来た事を知らせる。

「いただきます！」六人家族そろって、両手を  
合わせて、丸いちゃぶ台を囲むひととき。そこに  
は確かに、昭和の食卓風景があった。「おかわりし  
てもええんよ。たんと食べて、大きくならんと  
ね」しゃもじで茶碗にご飯をよそおう、手ぬぐい  
を姉さんかぶりした母の明るい笑顔が、炊き立て  
ご飯の、ほんのり香る湯気の向こうに、見え隠れ

している。「おいしい。おかわり！」と母に二杯目  
の茶碗を出す時の、得意満面なああの気持ち。ご飯  
の他には、畑から取ってきたばかりの、新鮮な野  
菜を使つての、具沢山みそ汁ときゅうりやナスの  
糠漬けが、わが家の定番のおかずだった。

そんなある日の事、突然降ってわいたような不  
幸が、わが家を襲った。大黒柱の父が、引き揚げ  
時の苦労がたたつて、重度の結核に侵されたの  
だ。大事な働き手を失い、稲作作業が、母の細腕  
に重くのしかかってきたのだ。必率的に私たち子  
ども四人は、田植えや稲刈り、脱穀などの一連の  
農作業に、小学生ながら駆り出された。夜の月明  
かりの下、黙々と働く母を見ていると、手伝わざ  
るを得なかった。

こうして十年あまりの年月が流れ、父がようや  
く退院して来た。母も安堵したようだったが、病  
に長いこと伏していた父には、稲作りの農作業  
は、もう無理だった。畑の草引きなどの軽い仕事  
をこなしていた。その内にわが家にも、機械化の  
波がやって来て、田植え仕事を、専門業者に委託  
するようになった。

今もよく思い出す。丸いちゃぶ台を囲んだ、昭

和のわが家の食卓風景を。ご飯のあのいい匂  
い。噛みしめて頂く、炊き立てご飯のおいしかっ  
たこと。家族で食事する幸せなひととき。何にも  
代え難い思い出の一コマである。